

『方丈記』 末尾にみる長明の意図

沼 波 政 保

一

「これでよしっ」。長明は大きくうなずいた。心血を注いで書き綴った『方丈記』がようやく完成したのである。彼は満足感に充ちていた。

思えば様々のことがあった人生だった。若くして父を失い、その後も「をり／＼のたがひめ」に出会い、永く持ち続けた鴨社の禰宜への望みも叔父の専横によって絶たれた。その理不尽な処置に逆上した彼には後鳥羽院の厚情も耳に入らず、彼は突然に大原の奥の出家者の中に身をくりました。しかし、出奔してはみたものの一時の激情が冷めると、大原での生活は彼の心を満たすものではなかった。「むなしく大原山の雲に臥して、また五かへりの春秋を」送っ

た彼は、「六十の露消えがたに及びて」日野の外山に一宇の小庵をむすんだのであった。

しかし彼は、閑居の生活に入ったとはいえ、都の文化圏の人々の動向と無縁でいることはできなかった。しばしば都に出かけており、歌会に参加したこともあったようである。『方丈記』にも「おのづから、事の便りに都を聞けば」とか「おのづから都に出でて」と、さらりとではあるが述べている。つまり、彼にとって、日野の閑居生活も心静かに落ち着けるものでは決してなかったのである。

その落ち着けない理由は何か。彼はみずからの才能、とりわけ文才に自負を持っていた。しかし、その才能も、このままでは山中の庵とともに朽ち果てるだけである。真の隠遁者であるならば、それこそ望むところである。しかし、彼はそうではなかった。文才に溢れた自分の名が命とともに消え去ることには、到底耐えられなかった。

そこで彼は、自分の名が後世に残るような一文をものしようと考えた。そして、時代を異にするが私淑していた慶滋保胤の『池亭記』に倣い、『方丈記』を執筆することにした。また、一時の激情によって出奔、出家した彼ではあったが、それが後悔されるものだということは彼のプライドが許さない。逆のみずからの閑居生活の正当性を弁じる必要があったことも、『方丈記』執筆のもう一つの動機であっただろう。

二

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、

久しくとどまりたる例なし。世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。^①

長明は、全精力を込めて、『方丈記』を綴り始めた。典拠を探し、何度も何度も推敲し、対句、比喩、構成すべてにおいて気を配り、彼の文才を世に残しめるべく、懸命に綴った。人と栖を中心に無常の理を説き、そして無常の実例を挙げ、そういう煩わしい俗世を離れた生活こそが精神的自由を満喫できるものであることを得々として述べたその作品は、まさに名文の名にふさわしいものとなった。

綴っていくにしたがって、精神的自由を持ち得た閑居の生活への彼の思いは次第に高揚していき、その高揚した思いは、

もし、人このいへる事を疑はば、魚と鳥との有様を見よ。魚は、水に飽かず。魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は、林を願ふ。鳥にあらざれば、その心を知らず。閑居の気味も、また同じ。住まずして、誰かさたらん。

と高らかに言い切る。「住まずして、誰かさたらん」と言い切る長明には、閑居の生活を送っている自分に対する強い自負がうかがえる。

ここまで書き至って長明は、「よしっ」と大きくうなずいたのである。まさに後世に残る名文が完成したのである。彼の『方丈記』執筆の動機も満たされ、また、閑居の生活の正当性も主張できた。彼は満足感に浸ったのである。

三

しかし、そこまで誇らかに語った後、ふと見上げると月は西に傾いている。その月と同様、自分の余命もいくばくもない。その自分が草庵に執着しているとは、仏道修行どころか仏の教えに背いていてではないか。「住まずして、誰かさたらん」と高らかに言い切り、満足感に浸った次の瞬間に彼を襲った思いは、余命いくばくもない自分が草庵に固執していることへの反省である。いや、反省などといった生易しいものではない。閑寂に執着して仏の教えに背いている自分への詰問である。

そもく、一期の月影傾きて、余算の山の端に近し。たちまちに三途の闇に向はんとす。何の業をかかこたんとする。仏の教え給ふおもむきは、事に触れて、執心なかれとなり。今、草庵を愛するも、とがとす。閑寂に着するも、障りなるべし。いかが、要なき樂しみを述べて、あたら時を過ぐさん。

静かなる暁、このことわりを思いつづけて、みづから心に問ひて曰く、世をのがれて、山林にまじはるは、心を修めて、道を行はんとなり。しかるを、汝、姿は聖人にて、心は濁りに染めり。栖はすなはち、浄名居士の跡をけがせりといへども、保つところは、僅かに周梨槃特が行ひにだに及ばず。もしこれ、貧賤の報のみづから悩ますか。はたまた、妄心のいたりて、狂せるか。その時、心さらに答ふる事なし。ただ、かたはらに舌根をやとひて、不請の阿弥陀仏、両三遍申して、やみぬ。

出家し、草庵に住するのは仏道修行のためではなかったのか。それなのに草庵に執着し、得々とその楽しみを述べているお前は、一体どうしたのか。みずから問い詰めた結果、長明は答えることができなくなってしまった。どうしようもなく追いつめられた彼は、うめくように、救いを求めるようにして「不請の阿弥陀仏」を両三遍唱えるしかなかった。

四

この「不請の阿弥陀仏」については、法事を修する際に行なう「奉請」を行わない「不奉請」と捉えるべきだということ、かつて考察した^②。供養する対象を「奉請」することは、仏教の儀式においてはもちろんのこと、広くそういった考え方が古くからあった。神楽の語源が「神座^{かみざ}」だといわれ、神楽はまず採物と称する短剣などを手にして舞い、その採物に宿った神を安置する場を指すということ、『日本書紀』にみられる、いわゆる海幸彦、山幸彦の話において、弟に懲らしめられた山幸彦が弟のまもりとならんとするのに、そのしわざをまねたということ、『平家物語』の成立について記す『徒然草』第二二六段から考えられるように、怨霊となった平家の人々の鎮魂を意図した慈鎮和尚が、鎮魂する霊を呼び出すために平家の人々の生前を語る必要から『平家物語』を書かせたということ、さらにそれを盲目の法師生仏に語らせたということ、また『看聞御記』にみられる、三回忌や七回忌の法要の際に儀式の一つとして『平家物語』が語られ、その後説経がなされたということ、等々からそのことを知ることができる。『耳なし芳一』で平曲

を語った芳一の前に平家の武将が現れたということも、小泉八雲がこのことをよく理解していたからである。

つまり、法事を修する際に、まず、弥陀や釈迦をはじめ諸仏諸菩薩を「奉請」することは、平安朝をはじめ長明の当時ににおいても広くなされていたであろうことであり、長明も当然のことながら、仏教の法事を修する際の作法を知っていたことは間違いない。しかし、みずから問い詰めた結果、何とも答えることができなくなった長明は、もはやどうしようもなく、念仏を唱えるしかなかった。とても、「奉請」を行なうような余裕はない。「奉請」を行なわねばならないことは承知しているけれども、切迫した長明はそれを行なうゆとりがない。「奉請」を行なわない「不請の阿弥陀仏」を唱えるしかなかったのである。

しかも、長明が今いる場所は方丈の庵である。そこには「阿弥陀の絵像を安置し、そばに普賢をかけ」ている。路傍ではないのである。路傍では「奉請」の作法もなしに念仏を唱えることもある。しかし、今は眼前に阿弥陀の絵像があるのである。阿弥陀の絵像に向かい合っているのである。普段ならば「奉請」をしてから念仏を修するのである。しかし、自問の結果どうしようもなく追い詰められた長明に、「奉請」の作法を行なう暇はなかった。もう、ただただ念仏を唱えなくてはいてもたってもおれなかったのである。

このように「不請」の解釈について、私は「不奉請」と捉えるべきだと考えるが、「諸仏の儀式を修し、形式的に請仏することは自分をいつわることであるから、どうしても『奉請』の儀式をととのえることができなかった^②」のでもなく、「長明は、仮に阿弥陀仏を請じ奉ることが儀礼としてできる財力や社会的地位をもっていたとしても、到底、請じ奉るに堪えない、心に恥ずる所があった^①」のでもないと考える。また、築瀬一雄氏が「長明はそれ（＝請仏の儀礼）を

さえもとのえる暇を惜しんで、阿弥陀仏にすがざるをえなかった自己を述べていると思うのである」といわれるのには同感であるが、「弥陀への帰依という一道の光明を見いだした感動をもって筆をおいた」と捉えられるのには賛同しがたい。そこまで長明は至ったであろうか。

五

みずからに問い詰められてどうしようもなくなった長明は、他に何の手だてもない状況の中で、ただただ念仏を唱えるしかなかった。そこには、長明の深い苦渋がにじみ出ている。絶望したのではないが、また救いを見出したのでもない。自問の結果、どうしようもなくなった苦しい長明の思いを、私は感ずるのである。

その苦しさは、前段まで見事な構成、論理をもって述べてきた、その全てを否定し去ることを敢えてせざるをえなかったほどである。得々と述べてきた悠々自適の閑居生活、その精神的に自由な生活のすばらしさを主張してきたことを、根底から否定せざるをえなかったのである。ここに至って『方丈記』の構成は崩れ去ってしまった。心血を注いで綴った名文としての『方丈記』は、ひいては文才溢れる自分の名を後世に残すというもくろみは、脆くも崩れ去ってしまった。しかし、長明は、それでも記さずにはおれなかったのである。この点から、この末尾の部分が最初から予定されていたものであるという捉え方には従いがたい。私は、「住まずして、誰かさたらん」と高らかに語ったその次の瞬間に長明の心に起った苦惱を、率直に語ったものであると考えるのである。

すでに述べたように、『方丈記』を書き上げた満足感に浸っている長明の心に次の瞬間に訪れたのは、草庵に執着している自分への深い自責の念である。草庵に在って仏道修行すべきは自分の自分、知らず知らずのうちに草庵に執着してしまっていたことへの深い反省である。それは何よりもしてはならない仏の教えに背くものである。このあたり、激しやすく冷めやすい彼の性格がよく表れていると思うが、長明はこのことに思いが至った時、奈落の底に沈むように苦悩の底に落ち込んでしまった。今、閑居の生活のすばらしさを高らかに語ったことは、とりもなおさず草庵の閑寂な生活に執着していることであり、それは明らかに仏の教えに背いている。西に傾く月のようにみずからの余命もいくばくもないのに、この体たらくは何事か。長明は、心血を注いで書き上げたこの一文が、実は出家閑居して仏道修行を志したはずの自分から、はるかにかけ離れてしまった自分を物語っていることに気づいた。

得々として述べ、「住まずして、誰かさたらん」とまで言い切った悠々自適の閑居生活が、実は執心を戒める仏の教えに背くものであることに気づいた彼の心は、打ちひしがれていた。『方丈記』を見た後世の人が長明の草庵生活への執心に気づかないはずはなからうということも、長明の脳裏をかすめたであろうが、それよりも長明自身の心中でその執心への悔悟が強く大きくなっていった。

けれども、無常の理から説き起こし、閑居生活のすばらしさを説いて、みずからの出家遁世の正当性を主張したことを捨て去ることは、みずからの後半生を否定することになり、プライドの高い長明にはできない。しかし、それは仏の教えに背いている。両者の狭間で苦悩した長明は、仏に救いを求めるしかなかった。

みずから問い詰め、どうしようもなくなった長明は、ただただ念仏を唱えて仏に救いを求めるしかなかった。とても

「奉請」の儀式を整える暇などない。「不請の阿弥陀仏」を兩三遍唱えるしかなかったのである。最後の「やみぬ」という言葉に、長明の何ともいいようのない苦しい思いがにじみ出ているように思えてならない。あれほど文才にすぐれた長明が黙ってしまうしかない苦しみ、それを「やみぬ」と書くしかなかった長明。最後に「時に、建曆の二年、弥生のつごもりごろ、桑門の蓮胤、外山の庵にして、これを記す」と形式に従って書き入れる長明の苦渋は、思いやっても余りがある。

長明の苦悩の告白は『方丈記』の構成を崩すものであり、「住まずして、誰かさたらん」までを全て否定するものである。しかし、そこには人間長明の苦悩が素直に出ており、それは、現世の美の象徴である花に執着する自己を見つめた西行の、やはり人間としての苦悩に通じるものであり、我々の胸を打つものである。そして、結果、長明の執筆当初の思いとは異なったが、『方丈記』は、今日まで文学として高い評価を得るに至ったのである。

六

さて、私は『方丈記』をこのように捉え、『方丈記』の文学的価値は、「住まずして、誰かさたらん」までの文章の見事さもさりながら、その末尾にこそ在ると考えるのであるが、ここで、それまでの全てを擲ってまでその末尾の一節を記した長明の心境を、視点を変えて考えてみたいのである。

長明の『方丈記』執筆の動機については、前述したように、みずからの名を残すためにその文才を駆使して名文をも

のすること、閑居の生活に在るみずからの正当性を主張することにあつたと考えるのであるが、その後者について、彼は実際には、草庵において俗世との関係を絶ち、ただ一人悠々自適の精神的に自由な生活を送ることに心底から満足していたのではなかつた。それは、大原の奥でのことではあるが「むなしく大原山の雲に臥して」と記していることからもうかがえる。たしかに、日野の外山の草庵のようなただ一人の生活とは異なり、大原では同じ出家隠遁の生活とはいえ同じような隠遁者が複数いたのであり、そこで人間関係の煩わしさも「むなしく」という理由の一つではあつただろうし、また大原の出家者たちの文化レベルとのギャップもあつたかもしれない。しかし、日野の草庵に住してからも、長明はしばしば都に出かけている。彼は、俗世の煩わしさから離れ、草庵で自由な孤独の生活を送りながらも、やがて誰にも知られることなく朽ち果てていくことを願っていたのでは、決してなかつた。ただ、このことは長明一人のことではなく、当時の隠者といわれる人たちが、多かれ少なかれ、仏道修行者としての立場にありながら知識人としての立場を完全に捨て去ることができず、したがって隠遁者のようにすべてを捨て去り、奥深い山中のような「絶域他方」に姿をくらまし、俗世との縁を完全に断ち切るというようなことはできず、人里近い所に草庵を結んだことと同様である。隠者は眞の隠遁者ではなかつたのである。何よりも、長明が『方丈記』を書き残そうとした動機自体が、このことを物語っている。

しかし、みずから選択した閑居の生活に満足できていないことを素直に語ることは、彼のプライドが許さなかつた。激しやすく冷めやすい性格から大原の奥に姿をくらましたものの、冷静になってみれば都の文化圏の外に飛び出してしまったことは後悔されることであつた。しかし今更都に戻るわけにはいかない。都へ戻れば、出奔したことが誤りであつ

たとみずからに認めなくてはならない。よって、大原での生活では文化的欲求が満たされなかったことを理由に、大原の奥に比しているいろいろな意味において都との距離が近い日野へと居を移したのである。「むなしく」の内容が何であつたか長明は触れていないので詳らかではないが、事實はともかくとして、『方丈記』で記す「むなしく」はそういう意味で表現したのではないか。そして日野の閑居生活も隠遁者としての生活であり、それは出家して大原で送った生活の流れの延長上にあることになり、何ら矛盾はないことになる。

長明は『方丈記』において、なぜ出家して隠遁生活に入ったかを説き、その生活がいかに心休まるものであるかを語る。すなわち、この世の無常を説き、その実例を挙げ、そのような煩わしい俗世を離れたことの正当性を主張する。そしてその草庵生活がいかに精神的に自由で素晴らしいかを語るのである。その語りは次第に熱を帯びていき、遂には「住まずして、誰かさたらん」と高らかに言い放つところまで高揚した。

しかし、長明は、みずからの心が実は一時の激した感情によって閑居の生活に入ったことを後悔しているということを知っている。俗世との縁を完全に断ち切ることを望んでいない、いや、断ち切るどころかどこかで俗世と繋がりを持ちたいと望んでいる自分の心を知っている。ここに至って長明は、みずからの心の中に渦巻く矛盾に苦悩するのである。それならばここで、書き上げた一文を破棄すればよいのである。しかし長明は、ここまで書き上げたものを破り捨てることはできなかった。それは、一つにはみずからの名を後世に残したいという思いであり、一つにはなぜ自分が閑居の生活に入ったかを語り、そのすばらしさを語ることでその正当性を主張するものであったからである。いずれも、その根底には、彼の才能溢れる知識人としてのプライドがある。いまさら、みずからの出家遁世を一時の激した心によるも

のであって後悔していることであると素直に認めることはできない。自分はどこまでも無常の俗世を見つめ、論理的思考の結果、精神的自由を得たのである。それを、実は後悔されることであつたと素直に認めることは、五十歳にして出家してからこれまでの人生をみずから否定することになる。世間の人がどう見るかもあつただろうが、彼自身に対してもそれを認めることはできなかった。

このみずからの心中に渦巻く矛盾をどう解決したらよいのか。行き詰ってしまった長明がそこで採った手段は、仏にすべてを委ねるといふ手法である。仏によってみずからの行為を指摘され、それに対して深く反省するといふ手法である。自己の心中の矛盾による人間としての苦悩を、一段と高い仏の声によって解決する、いわば人間レベルの問題を仏のレベルに止揚することによって一挙に解決を図るのである。『方丈記』末尾は、自問のかたちをとりながらも、仏の教えによってみずからの咎を指摘され、その指摘にただただひれ伏すというかたちになっている。こうすれば、長明という人間レベルでの矛盾は仏のレベルに止揚され、長明自身の不明を恥じることにはならない。仏に指摘され、叱られたのであるから。

七

実は、人間レベルの問題を仏のレベルに止揚して一挙に解決を図るといふ手法は、仏教説話においては頻繁に用いられる手法である。例えば、夙に有名な『今昔物語集』巻十九第十四話「讃岐国多度郡五位、聞法即出家語」がある

『発心集』にもある)。讃岐の源太夫は国人も恐れるほどの乱暴者だったが、ある時、講を見かけ、物珍しさから中へ入った彼は、講師の説く教えにたちまち出家し、「阿弥陀仏ヨヤ、ヨイヨイ」と呼び、鉦を叩きながらひたすら西へ西へと進み、最後は西に海の開けた絶壁の樹上で阿弥陀仏の「此二有」という声を聞いて往生を遂げたという話である。この話は仏教説話の傑作とも言える感動性の高い話であるが、源太夫は

心極テ猛クシテ、殺生ヲ以業トス。日夜朝暮ニ、山野ニ行テ鹿鳥ヲ狩リ、河海ニ臨テ魚ヲ捕ル。亦、人ノ頸ヲ切り、足手ヲ不折ヌ日ハ少クゾ有ケル。亦因果ヲ不知シテ、三宝ヲ不信ズ。何況ヤ、法師ト云ハム者ヲバ故ニ忌テ、当リニモ不寄ケリ。如此クシテ悪奇異キ悪人ニテ有ケレバ、国ノ人ニ皆恐テゾ有ケル。

といった極悪人である。その源太夫が、説経の講師から教えを聞いた途端、発心出家し、最後は阿弥陀仏の声を聞いて往生を遂げたというのである。たしかに、発心出家すること自体に功德があることは仏教で広く説かれることではあるが、そうとはいえ、今まで積み重ねた悪行については、何の懺悔も語られていないし、滅罪も語られていない。仏教説話を相手にしていると、このような話に頻繁に出会い、また何の疑問も抱かず当然のように受け取りがちであるが、考えてみればおかしなことである。何の罪滅ぼしの行為もなく、ただ発心出家して極楽往生を遂げるのである。

これは、人間レベルでの罪を、仏に帰依し、仏の救いにあずかったことよって一挙に消し去ってしまう手法である。つまり、人間レベルの問題を一挙に解決する手法として、仏レベルに止揚するということがなされるのである。そこに仏菩薩の功德の広大さを実感させるという仏教説話たらん意味があるのであるが、こういった手法は、頻繁に見られるのである。

今、長明が、『方丈記』末尾において、仏の教えに背いている自分をみずから責め、そして黙するしかなくなって、ただただ仏にすがり、「不請」の念仏を両三遍唱えるしかなくなってしまったとすることは、長明という人間レベルの問題を仏のレベルに止揚するという手法を用いることによって、みずからの心中の矛盾を、みずから傷つくことなく解決を図ったということなのである。

八

文学はあくまでも作品が対象であって、作者の実像が対象ではない。作者はどこまでも作品を通してうかがえる作者でなくてはならない。『方丈記』の中で長明は「茅花」や「岩梨」、「零余子」、「芹」、「木の实」などを食し、「落穂を拾ひて、穂組をつく」ったとある。これを捉えて、出家するまでの五十年ほどを貴族社会で暮らした長明にできることではないと指摘することは無意味である。『奥の細道』で芭蕉は佐渡ヶ島を見られるルートは通らなかつたとか、市振の宿に遊女は泊まっていなかつたなどということも同様である。『方丈記』の中の長明はどこまでも木の実などを食していたのであり、『奥の細道』の中の芭蕉は佐渡ヶ島を見て「荒海や」の句を詠んだのである。どこまでも作品中にみられる作者を見なくてはならないのである。文学としては、素直に作品の中で表現を受け取るのが正しいのである。

しかし、人間の精神的営為の表出たる文学の受容という意味において、作者が作品を仕上げる、その過程の心理に注目することも、間違いなく人間の精神的営為を見つめていくという意味において、決して無意味なことではなからう。

虚構を用いるその奥に作者の精神的真実があるのである。したがって、なぜ長明は食べることもできない木の実を食べたと記したのか、芭蕉はなぜ泊まりもしていなかった遊女と同宿したと記したのかと考えることは、人間の精神的営為の表出としての文学を受容する上において必要なことである。

今、『方丈記』末尾について、すでに述べたように、そこに長明の人間の苦悩を見、その正直な告白と受け取って感動することこそ、正しい受容の仕方であろう。それを、あれこれと詮索することは、文学受容の方法としては間違いかもしれない。しかしまた、長明がなぜ、それまでのすべてを擲ってまで末尾を記したのかを考えることも、『方丈記』という作品を書き記した長明という一人の人間の精神的営為を探ることであり、『方丈記』理解に僅かながらも資することであると考えるのである。

注

- (1) 『方丈記』の本文は角川文庫本による。
- (2) 『不請の阿弥陀仏』私考(『同朋佛教』第二十・二十一合併号(昭和六十一年五月所収))
- (3) 山田昭全氏『不請阿弥陀仏』私見(日本文学研究資料叢書『方丈記・徒然草』所収・九二頁)
- (4) 神田秀夫氏(『解釈と鑑賞』昭和四十年一月号)
- (5) 築瀬一雄氏『方丈記全注釈』(角川書店・二七九頁)
- (6) 『今昔物語集』の本文は、岩波古典文学大系本による。